

私は大の猫好きです。それも、都会では絶滅が危惧される野良猫派です。先月末に出版した「医者にがんと言われたら最初に読む本」（エクスナレッジ）でも、猫の目線でごんについて考察した「ネコから学ぶがんのトリセツ」という章を作ったくらいです。

今、空前のネコブームです。ペットの数は猫が犬を逆転し、猫カフェも大人気。なぜこれほどの猫ブームが起きているのでしょうか。

前述の本で対談している恩師の養老孟司先生も述べられています。都市化された現代社会において、猫は最も身近な「自然」であることがその理由ではないかと思っています。実際、都会の中を闊歩

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

猫に学ぶ 生き方・死に方

（かっぱ）する猫は自然そのものです。

しかし、飼い猫の高齢化によって、がんが増えています。乳がん早期発見を啓発する「ピンクリボン運動」があり

ますが、猫の乳がんについても、「キャットリボン運動」が始まっています。

がんは細胞の老化といえる病気です。高齢化ががんを増やす最大の要因ですから、野

し」をすれば、動物だって「がんになるまで長生きする」ということです。

動物園の動物たちも長生きしますが、ペットほどではありません。動物園は「自然を

良猫ががんになるのは珍しいことです。野生の環境では、猫が、がんになるまで長生きするのが難しいからです。

他方、ペットのがんは増えています。動物の放射線治療が大はやりですし、ペットのPET（ペット）検査（陽電子の検出を利用した最新の画像検査）も行われています。人間と同じような「よい暮らし

模した」場所だからです。がんの頻度は、高い順にペット、動物園、野生動物です。

猫は毎日、エサを食べて、少し動いて、それ以外はほとんど寝て過ごします。運動と睡眠はがん予防効果があることがわかっていますが、猫の生活習慣はがん予防にも有効かもしれません。

猫の生き方は、今、この瞬間を大切に「マインドフルネス」そのものです。そして、猫は死に場所も自分で選ぶといわれています。人間はがんになると、あわてて死について考え始めますが、がんは死の準備ができる病気です。猫は天性の「死に方上手」だといえるでしょう。

（東京大病院准教授）